

ゴンクール兄弟とその時代 IX

—フロベール—

はじめに

人をどう判断するか。どうすれば正確にその人を把握できるか。フロベール、そしてゴンクール兄弟とは、そもいかなる人物であったのか。まず次を読んでいただきたい。

『ゴンクール兄弟 フロベールについてのゴンクール兄弟の評を想起すること。「もともと極めて率直な性格の人ではあるけれど、彼が感じ、悩み、愛するものについて口にすることは決して完全に言葉通りには受け取れない」』
『ゴンクール兄弟の一致してゴンクールを妬み深く信頼の置けない兄弟であるとして、そのことを想起すること……』

これはジュリアン・バーンズ著の小説『フロベールの鸚鵡』の中で、作中人物ジェフリー・プレイスウェイトが、フロベールにならってものした『紋切型事典』のGの項だ。この項はさらに続い

斎藤 一郎

て、『デュ・カン、ルイズ・コレ、フロベールの姪、フロベール自身、誰の言もそっくりそのまま信用するわけにはいかないことを想起すること。過激なる疑問を提出すべし、すなわち、誰であれ、彼が本当はいかなる人物であるかを知るにはどうすればよいか？』

(斎藤晶三訳)

それには、その人物の書いたものを念入りに読むのが最もいい、というのがわたしの意見だ。むしろ、ゴンクール兄弟の、正直に自己をさらけ出した『日記』を読むかぎりは、兄弟が嫉妬心著しく、その性狷介なりとする評を払拭するのは難しい。しかし、時を同じうして本人たちが書いた書簡集を平行して読めば、彼らの人となり
を完全に判断することができると思う。

一九九八年にピエール・ジャン・デュファイエフの周到なる校訂と注により出版された『フロベール、ゴンクール兄弟往復書簡』は、兄弟と、そして一八七〇年に弟のジュールが亡くなった後の兄エド

モンとフロベールの間に本物の親友同士の情愛と信頼のこもった交流が成り立っていたことを証明した。

けだし、書くという行為がいかに人の人格を磨き上げていくかを知ることになる。今更いうまでもないことだが、人は己れの書くものに倣うのである。

フロベールは自分の書いた手紙はすべてコピーして保存した。作家魂こそかくあらんといったものである。そして、書簡校訂者デュファイエフが「美しい」と評した真情あふれるフロベールの手紙はいずれもみごとである。いっぽう、時によっていったん『日記』に書いたものをいわば下書きとして、あらためて清書しなおしたようなゴンクール兄弟の手紙も即興の美にこそ欠けるものの、律義で高尚な心を偽りでなく感じさせる立派な書簡になっている。

『ゴンクールの日記』によれば、アルフォンス・ドーデはフロベールの死後だいぶ経って、その『書簡集第二巻』を読み、フロベールがかつてその親友のマキシム・デュカン（新聞記者、小説家）に対して、まったく低劣な嫉妬心にさいなまれていたことが分かってすっかり幻滅したといったそうさだ。やがて両者の関係は逆になり、デュカンの方がフロベールに対してそのような感情を抱くに至ったことを非難されるようになるわけだが、このドーデの指摘を受けてエドモン・ド・ゴンクールはこのとき、そしてドーデ自身も、それぞれに、暗黙のうちに、互いに憎悪しあうに至った友情の自分の場合のことを思い浮かべたのだという。ドーデはかつての友

人アレーヌ（ポール、地方物語作家）を、エドモン・ド・ゴンクールはビュルテイー（美術評論家）を、口にはださぬが、脳裏にえがいたと。（一八八九年四月二五日の『日記』）

げに、手紙は恐ろしい。フロベールほどの人でも、第三者のドーデのような人に読まれれば、その本心をすっかり見破られてしまうのだ。

それはそれとして、デュカンをはじめ、ここにあげられた人物たちは、いずれも、当時はジャーナリスト・文筆家として有名人だったが、所詮は世間的な冥利をのみ後生大事にする俗物だと、ついにフロベールたちからみなされてしまうに至る人物たちだ。

そもそも、作家たちは相互に尊敬しあう交際のなかに、決してこれらの個人的な友人を紹介することはなかった。あのマニー晩餐会に、作家というに足る人以外で招かれたのは、例外はあるが、ルナン、テース、ベルトロ等、学者として傑出した一流の人物のみである。そしてフィクションの小説創作において成功した者こそ真の文壇を形成するという自負は揺るぎないのだ。サント＝ブーヴとて所詮は批評家にすぎないが、小説を発表したことがあって、文学者とみなされている。ゴンクールは終にルナンを認めるには至らなかった。

書簡を読んで、フロベールがゴンクール兄弟を真摯な文人として一貫して尊重していたことが分かる。孤独に徹して精励刻苦する作家同士の連帯感、その、想像力と創作力に対する尊敬、そこに彼ら

の友情の根底がある。

フロベールのイメージ

ゴンクールの『日記』にえがかれたクロワツセのフロベールの最も印象に残る姿は、座ったままいつかな動こうとせず、散歩くらいしなさいよ、といい残して出掛けた母親がルーアンから戻ってみると、息子が依然として、その場所にそのままの格好で座っているのを見て、胆をつぶさんばかりだったというその執筆の精進ぶりだ。

（『日記』一八六三年十一月一日）ゴンクールによれば、フロベールは「巨漢、壮健。大眼突出し、眼瞼肉厚くして、豊頬。剛毛の髭垂れさがり、顔色は火入れして鍛えたる如く、赤色の雀斑（そばかす）を配す」（二八五九年五月十一日『日記』フロベール三十六歳）なかなかの美丈夫で女性にも大いにもてたから、一年に四、五カ月をパリで過ごすあいだ、ときに有名なクルティザーヌのサバティエ夫人、トゥルベ夫人などのサロンに招待されると出掛けたが、その他のときにはどこにも行かない。ただ数人の友達とだけ会い、熊さながらの生活をしていた。

一八六七年一月十二日といえば、フロベールは四十五歳のまさに壮年期、その日のクロワツセからのゴンクール兄弟あての手紙で、男同士の露骨な表現で、己れの欲求不満、無聊を語ると、サンド夫人は自分の精進を一向わかつてくれず、時々美女の御訪問があるの

でしようなどと手紙を寄越す、まったくわかつちやいない、男が女性ぬきで暮らすことも可能なのだということがどうして女性たちはわからないのだろう、わたしは友とするのは鼠の一連隊のみであり、毎夜頭上ですさまじい淫靡な音を立てるので、ねこいらすを仕掛けたら、犬があたつて死んでしまったとある。

「風、雨、まぎれもなき暗闇、両岸を打ち続ける河音、悲鳴をあげる裸木ども、これがわたしの絵のまったき背景です。ランプの灯をたよりに、仕事部屋の静寂の中で己れの文章をどなりたてているのです。朝四時に寝ます。そして起きるのが正午。おふたりの友人の生活はかかる次第ですよ」

フロベール自身が、かつて生涯の己れのそのような生活を想定し、洞窟の奥にひそむ熊に己れを擬し、熊の毛皮の敷物の上に熊である自分は横たわり、おぞましくブルジョアから遠く離れて暮らしたいなどとコンスタンティノーブルから母親宛に手紙を書いている。

「むろんわれわれとて例外ではない」とゴンクール兄弟はいう。十八世紀の文学者は社交界に出入りし華やかな生活だったが、十九世紀の文士のやむにやまれぬかかる「熊性」は、これこそなものも打ち破れぬものだといふのだ。（一八五一年五月十一日）『大革命期社会史』を書くのに、兄弟は燕尾服の類いは人にやり、懐中時計も質に入れ、外出を不可能にした。女、娯楽、気晴らしの一切を廃する。「不断の労働、頭脳の不断の緊張だ。多少の運動だけは

してもよいことにした。だが、それも、もっぱら暗闇のなかを、都心を離れた大通にかぎった。家のそとでの楽しみによって、仕事から引き離され、自分の著作に精神が沈潜するのをさまたげられないようにしている」というのだ。(一八五四年二月末) だから無知蒙昧のブルジョア階級の何という笑止千万の誤解であろうか。これら作家なる人種を、いつもお祭気分で、御乱行、ほかの人の二倍も生きているのだと想像する。作家とは社交生活から遠く離れ、作品に打ち込んで孤独に暮らす労働者なのだとつくづく述懐している。

もつとも、ゴンクールの『日記』には、陽気に踊る熊のフロベールもえがかれてはいる。ヌイイのゴンクール兄弟と一緒にゴーチエの家に押しかけたとき、「サロンの白痴を踊れとラジヴィル公(ゴーチエの愛したイタリアの舞姫カルロッタ・グリジの夫、ポーランド貴族)はじめ皆にいわれて、家の主人から燕尾服を借りたフロベールが、取り外し式のカラーを高くし、髪をくしゃくしゃにする」と突然、精神痴鈍症の男に一変し、玉なす汗のゴーチエと一緒に、踊りまくった」というのだ。(一八六二年三月三十日)

ゴンクール兄弟とフロベールの出会い

一九五七年正月三日の『ゴンクールの日記』にはじめてフロベールが登場する。当時、画家と作家の交流で重要な役割を果たしていた雑誌社「ラルテイスト」の事務所で、編集長のゴーチエが、その

朝フロベールがいった言葉「形式より思想は生まれる」に惚れこんで、われら一派の最高の表現だから壁という壁に彫っておきたいものだといったというのだ。

事務所で、この二人は比喩(メタホール)のあれこれの是非について議論し、アソナンス(半音階、詩句の終わり、類似の母音を繰り返すこと)はたとえ一個なりとも一週間かかっても除去すべきだとフロベールが主張したともいう。(四月十一日)

ゴンクール兄弟はこの文体論には一線を画していた。兄弟の感情の動きに忠実な口語体といってもよい文体は芸術的文体と評されたが、フロベールの文体への固執ぶりを空理空論とみなしていた。

フロベールは『ボヴァリー夫人』が風俗壊乱罪で起訴され、一月末に裁判に臨み、二月に無罪となる。そして四月に出版されるや、一躍、文壇の寵児となる。この時、フロベールは三十五歳、ゴーチエ四十六歳、エドモン、三十四歳、ジュール、二十六歳だ。

一八五八年に入ると、熊を標榜していたフロベールがパリに戻って、『ボヴァリー夫人』に次ぐカルタゴを主題にした小説第二作の取材にとりかかったが、十一月のある日ゴンクールの家の夕食会にサン＝ヴィクトール等とよばれ、サドが目下の関心事らしく、談論風発したことが『日記』に書かれている。舌なめずりするようにサドの破廉恥行為を聞きたがったとある。カルタゴを選んだのは、地球上で最も腐敗した文明だからだという。翌年一八五九年の五月には、フロベールはゴンクール兄弟がみたことがあるというカルタゴ

の戦闘用鉄槌（マス）のありかを訊きたいと、自宅を訪ねてきた。兄弟はサロンを自慢していたから、案内して、自分たちの描いたデッサンや骨董を見せて、フロベールを楽しませた。

フロベールは当時一八五五年からタンブル通四十二番地にアパルトマンを持っていたが、執筆のためにはクロワッセに籠もる必要があった。

一八五九年十一月十六日、ジュールは、リシユリユー宛てのシャトール公爵夫人の手紙を見せてもらうためにルーアンにひとり滞在して、駅で、ぼったりフロベールに会った。母親と姪がパリで冬を過ごしに出掛けるのを見送りに来ていたところだった。フロベールは立ち話で、執筆の苦勞を語った。カルタゴの字引がないため、呼称を遠回しにいわねばならず、時代色・地方色が薄まるとこぼしたという。

フロベールはパリは通りが広くなり、前よりプラティテュド（平凡さ）がひどくなった、愚鈍さがいつそ美化の極致に至っている、などといったが（一八五九年十二月十八日、モーリス・シユレジンゲール宛ての手紙）、そのパリに時々戻る。

一九六〇年一月十二日木曜、そういうフロベールを兄弟は最大限の気配りをして、自宅の夕食会に招いている。会食者はガヴァルニ、ジュール・ジャン、ポール・ド・サン＝ヴィクトール、オーレリアン・シヨル、シャルル＝エドモンとその夫人ジュリー、女性として別に、女優のドーシユ夫人だ。彼女こそ、一八五二年の『椿

姫』の初演者だった。打粉をふって髪をきらきらさせ赤いネットをかぶっている。

ジュールは『日記』でこの日の自宅の「こじんまりとしゃれた食堂」を自慢している。「壁と天井に（ルフランスとユエの原画による年代物の）綴織を張りめぐらし、（ジュール作の）極めつきのよい版画をいく枚か配し、さらにギユスターヴ・モローの堂々たる『王の閲兵』を懸けたところなのだ。それがボヘミア製クリスタル硝子のシャンデリアのきらめきとやわらかな灯火に明るく輝き、華やかだった」ルイ十四世風クレダンス（食器棚）が置かれている。

食卓での話題はもっぱらルイズ・コレのフロベールをモデルにした小説『彼』だったそうだ。料理は凝っており、この日のメニューは不明だが、ゴンクール家ではよくカレー料理、練りパイ、プディングが供せられ、レオンヴィル、サン＝ペレーの葡萄酒がふんだんにふるまわれたという。

芝居の総稽古があるとデザートもそこにドーシユ夫人が帰ると、サン＝ヴィクトールとシヨルも取材のため一緒に出掛けたが、フロベールは最後まで残り、大いに語った。

「芝居ってやつはそもそもが芸術じゃないんだ。ありや、こつなんだよ。その秘密を心得ている男から仕入れたんだがね。まず、シルク座の前のカフェ・デュ・シルクでアブサントを数杯ひっかけなければならない。そして、いかなる脚本だろうとござんなれとばかりにしゃべりまくる。《これは悪くない、だが……あちこち削除が必

「要だ！」とか《そうだなあ・・・しかしこれは芝居になつたらん》てなことをくり返す。ともかく、芝居の筋書きをいろいろ書くのはよいとして、決して芝居そのものを書いちゃいけない・・・いったん芝居を書いたり、フィガロに記事をひとつ書くだけで、もう駄目！・・・」

フロベールはまたこの心得を覚えてくれた男が、「ボーマルシエは偏見なり」といったと語り、「何たる恥さらし、シエリュバン（『フィガロの結婚』、オペラのケルビーノ）のような人物をひとりでも書いてみる」と叫んだそうだ。

『ボヴァリー夫人』の脚色には応じない、元来、着想なるものはひとつであり、一種類の鑄型にのみ適用されるものと断じる。その上で、フロベールはいった。

「ブルバール演劇で成功するにはどうせにやならんのか。君ら、お分かりだろうか？ 観客は次の場面がどうなるかを予測するってことなんだよ。いつかふたり連れの女のそばに座ったんだけどね、ふたりして続きの場面を、それからそれへと考え出すんだ。舞台の進行に従って、自分で芝居を書いているんだよ」

それから、仲間の文士の誰彼のこととなり、「この男なら一緒に暮らしてもよい、欠点もないし、我慢もできる、俗物ではない上に育ちもわるくないといった人物を求めるのは、はなはだ困難だ」ということになったという。「それから女優たちの品定めとなり、この不思議な人種のさまざまな奇習のあげつらいになった。フロベール

ルは彼女らを所有するための秘法を開陳する。情にもろくなければならず、女性はずべからくまじめに取り扱うことが肝要だそうだ。次いで、果たして男どもが吹聴するように、彼女たちがほんとうに寝てくれるものなのだろうか、いや、健康の配慮や疲れや芝居の労苦などのせいで、せいぜいちゃつき程度ですますのではあるまいかということが問題となった。女優の、その恋人の書く批評に及ぼす考えられぬほどの影響のはなしにもなった」そうだ。

けつきよく、フロベールだけが残り、葉巻の煙もうもうたる中、「彼は絨毯の上を行ったり来りしながら、シャンデリアの覆いガラスに頭をぶつけたりし、滔々と弁じ、わたしたちを精神的兄弟とみなして胸襟を開くのだった」と兄弟は感動をこめて書いている。

「フロベールは自分の隠遁生活、パリにおいてすら人づきあいを避け、鍵をとぎして閉じこもるその生活ぶりを語る。芝居嫌いを貫き、日曜に例のゴーチエ一派が『プレジダント』（女議長）と称しているあのサバチエ夫人の夕食会に出る以外は、いっさい楽しみを断つ。田舎は大嫌いだそうだ。一日十時間仕事をするのだが、つい読書にわれを忘れたり、仕事のまわりでいとも簡単に道草ばかりを食うはめとなり、やたらと時間を浪費してしまうのだそうだ。正午に仕事をはじめても、夕方の五時にならなければ熱が入ってこない。そもそも真つ白な原稿用紙の上ですぐ書きはじめることは不可能だそうで、ちょうど画家がカンヴァスの上に基調の色の絵具を塗ってみるように、まず、着想をいろいろ書きちらして紙を汚して

みる必要があるのだという」

「仕上がりよき」ものとか、文章のリズム、あるいはそれ自体で美しいものとかに関心をはらう人がいかに少ないかというはなしになり、フロベールはまた例の通りアソナンスを省こうとする作業の苦勞を語り、それがむなしのものにみえると嘆いてみせた。『ボヴァリー夫人』の成功も文体と形式の美しさによるのではなく、単にヴォードヴィルの通俗面のおかげなのだ。

フロベールは古典劇を称え、たとえば「自分でつけた火よりも熱い火でわたしは身を焦がし」（ラシーヌ『アンドロマック』）などというとつびょうしもない文句は、誰も思いついていないといったそうだ。ビュツフォンの「一個の真理を言い表す方法は人類にとつてはその真理そのものより有用なり」とか、ラ・ブリュイエールの「書く芸術とはすなわち定義し、而うして、えがきだす芸術なり」なども引用した。そして、自分の文体の座右の書はラ・ブリュイエールとモンテスキューとシャトーブリアンだといい、そこで「ぎよろりと目をむき、紅潮し、芝居の抱擁のように、アンタイオスが腕をひろげたしぐさよろしく両腕を挙げ、胸と喉から『スルラとユークラトス』（モンテスキュー）をしほり出した。まさに割れ鐘のような声をわたしたちにあびせかけたわけだが、さながらライオンの咆哮のようだった」そうだ。

当時、シャンフルリーなどボエーム（放浪芸術家）の作家たちが、ダグレオタイプなる写真機の向こうを張ったレアリスム文学

を標榜し、大衆小説で人気を博していた。一九五五年のシャンフルリーの『モランシャルのブルジョア達』は田舎の不倫事件を題材にした小説だったから、『ボヴァリー夫人』を構想執筆中のフロベールに不安を与えた。しかし、その安易平凡な文体に、ルーアンの作家はむしろ自信をおぼえたのだ。文体こそすべてであるというフロベールの確信が強まった。現代小説の後、カルタゴを舞台の歴史小説を考えたのは、むしろボエームのレアリスムに追随しない文学を書くという決意のあらわれだ。

そのカルタゴ小説の山なす取材ノートについて、フロベールはゴンクール兄弟に楽しく語ったようだ。

このときのフロベールの訪問をゴンクール兄弟がどれほど多し たかはいうまでもない。兄弟は芝居の脚本が不採用になり、既に相当量の十八世紀のモノグラフィイ数編と『一八**年』、『ソフィー・アルヌー』などの小説を発表したものの、さしたる評判も得ず、ようやくにして、一八五七年の『マリー・アントワネット』で若干の評価を得た段階だった。最初の本格小説『文士たち』（のち、『シャルル・ドマイ』と改題）はまだ出版する直前だった。

フロベールはゴンクール家で夕食をとった三日後の日曜日、自宅前のタンブル大通で転倒して打ち身をこうむり、顔面も怪我した。兄のアシルは医者への手紙で、不摂生のせいで「癩癩性発作」が起こったものといい、徹夜や興奮は危険なのでよくギユスターヴに説教してくれと依頼している。

『文士たち』にはフロベールらしい小説家が出てくる。ただし、ゴンクールはフロベールに他の群小小説家よりも高い地位を与えており、あからさまにモデル扱いにはしていない。ただ、ランプリエールという名の登場人物にはフロベールの面影が色濃い。

「わが小説家は、つい先頃の大成功で顔色もつややかな偉丈夫で、憔悴気味ながら堂々としている。何事にも耐えうるブロンズのとき体質、馬さながらの二十七時間の仕事、それも七ヶ月も連続、自室に缶詰状態なのだ。深々とした刺すような碧眼、戦闘に赴く満州族の口髭、大声、軍人並の高い声だ。何か人生において自己の奥底に押し殺したものを持つ人物だ。例えば、幻想とか夢とか不明なものを。この人物の深奥でいずれかの虚空への空しき登攀の憤怒と倦怠がうなり声を発している」

この小説『文士たち』についてのフロベールの批評は、本の出た翌日兄弟がテンプル大通を訪問しているので、直接彼らに口頭で語られた。その惜しめない賛辞に二人は熱のこもった友情を感じ、喜んだ。フロベールはアパルトマンの母親の住む上の三階（日本流で四階）におり、土地台帳によれば、控えの間と暖炉付き二間、これには大通に面した窓がひとつづつある、別に食堂と、暖炉のある部屋、台所、この三つは中庭から日を受けている。台所わきに空間、第二の階段出入り口がある。（前掲『書簡集』デュフィエフ注）

「通りに浮かれ出したくなるような、あの自分の芝居の初日と同様の興奮をふたりで味わい、——誰彼の見境なく平手打ちをくらわ

し、ステッキでぶんなぐるといふ、当節はやりの暴力沙汰をなんとなく期待するというか——ともかくうじうじと引つ込み思案になる気の減入るようなところからは出ようではないかといった気分

で、家を飛び出したのだった。早速タンブル大通のフロベールの仕事場に出かけた。部屋の窓は通りに面しており、暖炉の中央は金色のインドの仏像である。机の上には小説の原稿があるが、ほとんどが線を引いて消されている。

わたしたちの小説について、最大の暖かい心のこもった賛辞を呈してくれ、胸がいっぱいになった。これこそわたしたちが誇りにしている友情、ゆるぎない親密さと寛大な心情に溢れ、まっすぐに、誠実に、伝わってくるものだった」（一九六〇年一月二十五日『日記』）

兄弟の小説は新聞の批評も毀誉褒貶なかばしたもの、ジョルジュ・サンドに褒められ、二人は気をよくした。フロベールは打撲傷が完全には治癒せず、ひきこもっていたから、兄弟のほうが頻繁に訪ねた。そこで、フロベールの年来の友人ルイ・ブイエと出会った。しょっちゅうにんにく芬々たる野人肌の劇作家だ。田舎の人の吝嗇ぶり、ルーアンの中学の教師たちの列伝が話題となる。フロベールは中学時代、枕の下に短刀を突っ込んで寝ていたし、劇作家のカジミール・ドラヴィーニユの別荘の前では自分の二輪馬車をとめ、座席の上に立ち上がって、下劣なごろつきそこのけの野次をとばした話もでた。

ゴンクール兄弟とフロベールの交友

そんなある日、兄弟はブイエから、かつていたルーアン病院で、インターン仲間だった友人と修道女の淡い恋愛話を聞いた。その医学生は自殺するのだが、ブイエはその髪の一房を尼僧の手のなかに入れてやったというのだ。ゴンクール兄弟はいたく感動して、これを小説にすることにする。パリの慈善病院の取材に当たっては、フロベールの紹介が大いにものをいった。

フロベールは、兄弟に童貞を失ったのは母親の小間使にお相手してもらったおかげだったとか、バカロレア合格祝に若い医師のクロケ博士のお供で、南仏旅行を許された折、マルセイユの小ホテルで南米のリマ帰りの女性たちに会った話をした。三人とも背中からかかとすれすれまでの絹の部屋着をまとっていたが、ある日、海水浴から戻ったギユスターヴ坊やは、歳のころなら三十五ばかりの美形に、寝室に誘われたのだそうだ。彼が己れの魂を注ぎ込むような接吻をすると、その夜、女は彼の部屋に来てくれた。呆然とするような歓喜であったとか。そのあとはお定まりの涙、手紙の往復、そのあげくは音信不通だったというのだ。その後、フロベールは何度もマルセイユに行ってみた。ところが家そのものがわからなくなった。ついに、それが玩具屋に衣替えし、二階は理髪店になっていることがわかったそうた。髭をあたってもらって、眺めまわすと、あときの寝室の壁紙だけはもとのままだったそうた。

一八六〇年から第二帝政の終焉の一八七〇年まで、ということ兄弟のジュールの生きていた最後の十年間、このトリオの交際は完全な友情につつまれていたかというところ、むしろそうではない。フロベールはことのほかジュールの才気煥発、明朗闊達を愛してはいたが、それぞれに気力充実した壮年期の文学活動のなか、感情の確執、相互の張り合い、我が儘がときに爆発、露呈するのはいかんともなしたがたかった。

フロベールは折につけゴンクールのアパルトマンを訪ね、乞われるとルーアンでの「あくことのない勤勉と田舎出の人特有のがんばり」を証明する三年間の中学時代の「途方もない面白い話」をしたそうた。ブイエと一緒に書いた八行詩の悲劇の脚本の断片、ルーアンの新聞に出した記事ふたつのこと、そして、中学を出たあと書いた心理小説は無聊をかこつ青年が娼婦を訪れる話だといったりした。ジュールはフロベールの「牛のような執拗さ」を感じとり、やや辟易した気配をその『日記』ににじませている。

「じつをいうと、この率直かつ公平、開放的でしかも激しいほど明朗なこの性格には、単なる知り合いの状態から友情の粹にまで高める鉤原子（デモクリトス、エピクロススの原子論）すなわち共感要素といったものに欠けたところがある」とある。もつとも兄弟はここではフロベールの「他人行儀」をただ否定しているだけではない。

しかし、もう少し友情に厚くてもよいではないかというのだ。

「フロベールに、家に夕食にこないかと話すと、残念ながら夜しか仕事ができないので断るのである。ああ、何という笑止千万な人々の誤謬であったことか。これら作家たる人物を、ブルジョアの人たちは、いつもお祭り気分で、御乱行、ほかの人の二倍も生きているのだと想像する。ところがたつたの一晩すらも友情や社交に振り向けられないでいるわけだ。社会生活から遠く離れ、ある思索とともに、そしてある作品とともに、それに打ち込んで孤独に暮らす労働者。それが彼らの姿なのだ」

それでも、この直後兄弟はフロベールを自宅に訪ね、出たばかりのユゴーの『諸世紀の伝説』の感想を語り合ったりしている。ゴンクール兄弟自身はユゴーの作品がオリエンタリズムの絵画、とくにドゥキヤンの作品に酷似していて独創性に欠け、ことばもおおげさな作りものの戯画だとの評だったが、これをフロベールにそのままいってはいないのだろう。これに対するフロベールの反応の記述はないからである。いっぽうカルタゴを執筆中の小説家は「ユゴーは思想家じゃない、ナチュラリスト、自然愛好家なんだ。からだ半分が自然にどっぷり浸かっているという感じだね。血のなかに樹液が流れているんだよ、きつと」といったと『日記』（一八六〇年三月四日）に記している。もつともフロベールはユゴーが思想家きどりののが好きだといったそうさ。それから、ゴンクール兄弟が「御家族様用ミュッセ」と評した、当節はやりのオクターヴ・フイエが小説

で女性たちへの程度のわるい御機嫌とりに終始しており、それがよい宣伝になっているということになり、フロベールはいったそうさだ。「タマなしめ……それがあいつがほんとうには女性を愛しておらん証拠じゃないかね……女性を愛しているのなら、自分が女性で苦しんだことを語る小説を書くものだと思うよ。だいいち、苦しむ相手しかほんとうに愛せやしないのだからね」三人は大いに共感し、近ごろのきまり文句、「ぼくの母さん」のルフランをもつシャンソンとか「わが母へ」の本の献辞こそ「家族内いちゃつき」「売淫の最も不潔なもの」ではないかなどといい合ったそうさ。

むろん、兄弟にはフロベールの強烈な個性への反発も生じる。「そして、きょう分かったことなのだが、フロベールとわたしたちの間にも罅がある。彼には田舎の人、気取り屋特有の地金がある。彼がさまざまな大旅行をしたのも、ややルーアンの人々をおどろかせようという魂胆だったことがほの見える感じがする。彼は肉体的外観同様のどっぷり太った精神の持ち主なのだ。繊細なものが彼を感動させるとは到底思えない。文章もことのほかぶかぶかどんどんの大太鼓好みなのだ。その会話のなかには思想はほんのちよつぴりだ。それがけたたましい音をたていても莊重に持ち出される。声同様に精神が大朗読家調なのだ。彼のさまざまな話も彼がえがく人物像も、田舎の郡の化石の匂いがする。十年前の白のチョッキを愛用している。これぞ、当時マケール（芝居の悪党、ペラミ的詐欺師、名優フレデリック・ルメートル創始、ドミエの版画で有名）がエロア

(天使のごとき女性、ヴィニーの長編詩のヒロイン)をくどいたとき着用に及んでいたものだ。彼にはアカデミーや法王の意向にはむかつての、あの憤慨、怒りが多少は残っているといわんばかりなのだ。それによって、不信心に対するジョゼフ・ド・メーストルよろしく、「下品なことだ」などといえるという寸法なのだ。

昨日彼は国立図書館に金属の類いを調べに行った。きょうは植物園の鉱物標本室を見学に行った。アルジェリアの鉱山に関するフルネルの三巻本を読み、しかもけつきよく小説の中にはこの勉強で得た語などひとつも取り入れられないのだ。《でもぼくはねえ、葡萄酒を五十本空けてようやくコップ一杯のちよっぴり葡萄酒を混ぜた赤い水を飲むという人種なのさ》と彼はいう

ジュールが書いているとしても、これら人物評はエドモンも同意した上である。二人はようやく冷静に自分たちの友人を観察し始めたのだ。

「けつきよく、フロベールは鈍重で、過剰で、あらゆることに軽妙さを欠くのだ。冗談をいっても、風刺をやるにしても、モニエ(風刺作家)の真似のまねをやるにしても、目下懸命にまなんでいるところではあるが。ともかくこの牛のような快活さには魅力が欠けている」(一八六〇年三月十六日)

ゴンクール兄弟はこの後半月ぶりにフロベールに会うが、「疲労困憊、消耗し、仕事でへばっている」という。(四月一日)正月からカルタゴについての文献を五十冊も読んだというのだ。その一方

で、フロベールは兄弟から送られてくる本は丁寧に読み、感想を書き送っている。まことに律義なきちんとした信義を堅持している。

『ルイ十五世の愛妾たち』についても細かく感想を述べている。二十七歳で(毒殺を想定される)悲痛な死を遂げたシャトールー公爵夫人のことでは「これほど興味ぶかく読んだものはない」とか「ボンパドゥール公爵夫人についての御批評はみごとです。今後は誰も何もいうことができなくなった」とか最大級の賛辞なのだ。そして、「こういう女性たちのことを書いて、君たちは仕合わせです。

このぼくがやっているような架空の虚ないしは無にも等しきものに頭を酷使されるよりははるかにましです」と書いた。(一八六〇年五月十五日)それに対して、ゴンクールは「わが友よ、真の虚無とはたぶんそれは歴史のほうです。死そのものなのですから」と返事している。「それより、存在しない何かの上に存在する何かを築き上げることが肝心ですよ。そして、さまざまな思いが眠りながらも肉体を、名付け親を、作家を、登場人物を、ドラマを、ひとつの時間を待ちのぞんでいるあの混沌たる冥府状態から、何か偉大な新しい小説を奪い取るのですよ、そのような運命を嘆くというのですか。実のところ、とどのつまりが、過去の検死解剖をしていると、想像力は冷えこんで、まるで地下室の空気の中にあるようなことになるのです。ミイラの包帯を解くようなこれら記録の周囲には、あの石灰の粉にまぶされて保存されてきたものの匂いのようなものたちがこめる。それが頭をくらくらさせる。そして終に窒息させる。

トリオの文学論

だから大急ぎで空気と太陽と生命を求めてそこを脱出せねばならぬのです。それが小説ですよ。小説こそ、結局のところ、唯一の真実の歴史なのです」(六月十六日)

こんなことをフロベールに面と向かっていったということに少し驚かされる。釈迦に説法の感もする。だが、これこそが兄弟の本音だったのだ。これだけは正直に言いたかつたのだろう。彼らがいかに小説をもっとも価値あるものとみなしていたかがわかる。ゴンクール賞はフィクションにのみ与えられる。

それでもフロベールは兄弟に、自分は歴史が好きだ、死んだ人のほうが生きている人より気持ちいい、過去はどうしてこう人を誘惑するのか、なぜ君たちはルイ十五世の寵姫たちをこんなに恋しく思う気持ちにさせてくれるのか、などと手紙に書いて寄越している。

(一八六〇年七月三日) こういう過去への好みこそ十九世紀独特のものではないかといっているのだ。もとより、『サランボー』を書こうというフロベールはギゾーばりの政治外交中心の文明的歴史記述は毛嫌いしたのはまぎれもない。想像力によって個人生活の全体像をえがくというゴンクールの仕事を心から尊重していたのが見てとれるのだ。「歴史も小説のヴァンチュールも同じことだ。小説を書くときのもっぱらの関心事は色と調子を盛り込むことだ」と、フロベールは兄弟に語っている。「カルタゴ」では緋色のものを出したいと思っていると。

フロベールの病院医師の紹介状の御蔭で、充分の取材ができた小説『尼僧フィロメヌ』が出版され、ゴンクール兄弟から郵便で朝十一時に一本が送られてくるとフロベールは早速読みだし五時に読了した。その日のうちに札状を書き送っている。その中で、フロベールはすばらしい箇所として「神秘的なものの下に肉体を感じられるのがすばらしい。メダルのお守りの下でふくらみ始めた小さな乳首、イエスの血に混じる初潮の血、みごとで充実し読みごたえがある」などと書いている。

思春期の娘の心の昂揚と初聖体拝領の宗教的興奮とが競合するものとして小説にはえがかれており、兄弟は「宗教は女性の性の一部だ」などと書いたことがある。(一八五七年四月十一日)

この考えはヨーロッパの男性には根深く、今でも「女性の快楽と苦痛、官能と不安ないしは苦行との結びつきは時代を越えて、非常に古いものですよ」などという人がいる。(ベルナルド・アンリ・レヴィ『フランソワーズ・ジルーとの対話』三好郁朗訳) これに対して、フランソワーズ・ジルーは中国の男女は罪の概念などまったくないのに、濃密な性生活を享受しているのよ、とみごとに応じている。だが、一四〇年前、ゴンクール兄弟の固定観念は揺らぐ余地もなかったし、そのままそっくりフロベールのものでもあった。

フロベールはまた、「インターンの恋人のロメヌに惚れちまっ

たよ。ちくしょうめ、すっかり興奮させられた」などと書く。著者として、これ以上の賛辞をもらうことはまずあるまいといったものだろう。ロメーヌは兄弟が二人まとめて愛してもらったマリアという産婆を稼業とする美形の恋人がモデルだ。よくえがけているのはいうまでもない。兄弟は友情に感謝する礼状を書いた。

フロベールはカルタゴ小説の執筆で時間の余裕などあるはずもないのに、兄弟の依頼に応じてわざわざルーアンに出掛け、リシュリュウの愛人だったド・ラ・ポプリニエール夫人の長い手紙三通を写してパリに送ってやったりした。楽しい仕事だったと添え書きする。兄弟はその分量に恐縮する。うち二通を出版している。

だが、『サランボー』はゴンクール兄弟を当惑させた。兄弟は現代を題材にしたものしか認めないのだ。それに、折りにつけ、さまざまに疑問を呈してきたのに、フロベールはいまや文学を商人よろしく売り物にしており、しかもユゴの向こうを張って対抗しようとする虚栄心を感じるといふのだ。『日記』にはフロベールがユゴを「一応の尊敬もはらう必要もない相手」として語ったとある。

兄弟はしかし、フロベールとの親密な交際をだいじにはしていた。だが、サント＝ブーヴが『サランボー』に批判的であることを、訪問してきたフロベールにばらしたりしている。フロベールが激怒して、口ぎたなくサント＝ブーヴをののしったことが『日記』にそのままの言葉で語られているのだ。

だが、マニー晩餐会で、フロベールはサント＝ブーヴをつかまえて談じこみ、後者はけつきよく三つばかり記事を書くこと約束させられる。「いい男だぜ」とフロベールはゴンクール兄弟にいったとある。

「自尊心がだんだん彼のうちでふくれあがり爆発せんばかりになつていふのだ。・・・フェイドーの『ファニー』は大いに彼がなおしてやつたそうだ。だからフェイドーがフロベールにあまり相談しなくなつてから、その作品の出来がわるくなつたのも不思議ではないといふのだ。

フロベールは逆説だらけであるが、その逆説たるや彼の虚栄心同様に田舎者じみている。野卑であり、鈍重であり、いやらしく、わざとらしくて、品がない。彼には下劣な冷笑的皮肉がある。あらゆる種類の凝り過ぎた洗練され過ぎた主張、見せびらかすための、ポーズだけの主張がある。この人の底には、レトリックをあやつり、詭弁を弄する者の要素が多く含まれている。彼は猥褻なことをいつているときですら、下品であると同時に気取っている。女が与える興奮について、フロベールはそれをいくつにも細かく分類した。その女の眉に接吻したい気持だけをあたえる興奮だとか、手に接吻したいだけの相手だとか、真ん中で分けた相手の髪をなでるだけのものだとかを説明するが、要するに、こんなに簡単至極なことを、複雑めかし、もつたいをつけ、演出し、いかにもその道の達人のやり方はこうだと解説する。たとえば、ルイーズ・コレを馬車で

クロワツセ

送って行ったとき、手早くおこなった情交の具合を話したが、そのとき彼女に対して、自分がいかに人生に倦み疲れて、沈鬱で、自殺にノスタルジアを感じている男の役割を果たしたかをえがいてみせる。しかもその役割を演じるのがいかにも面白く、心の底から楽しかったので、馬車の窓から時々外に顔を出して、心ゆくまで笑ったというのだ。

道々、彼は現代はうんざりで、閉口させられる、ぞっとさせられると慨嘆した。そこを通る人々になんの親近性も感じないし、それらの人の内部に入りこんで小説をひとつ書いてみたい気などまるで起こらないのだそうだ。アメリカン・インディアンのほうが百倍も身近な感じがするし、大通りの上で現にわたしたちが見ている人々の誰よりも感動的だというのだ」

ゴンクール兄弟のこの書き振りには、しかし、フロベールに距離は置きながらも、愛すべき男と認める平常心は認められる。

『サランポー』はベスト・セラーとなり、第二帝政では仮装舞踏会が大流行だったから、ウージェニー皇后はサランポーの仮装を着たがった。プランセス・マチルドはフロベールにその衣装のデッサンを描いてくれとねだる。作者はオリエンタリズムの画家アレキサンドル・ビダに頼んだりした。けつきよくは、皇后等がからだの線を露骨に示すが如き衣装などもつてのほかということになり沙汰やみとなった。

一八六三年十月二十九日から十一月二日まで、ゴンクール兄弟はクロワツセのフロベールの家に滞在した。兄弟は車でフロベールが九歳年上の兄さんと一緒にいるのに会う。「ルーアン病院の外科部長のこの兄上は非常に背が高く、痩せて黒い髭のメフィストフェレス的風貌の人物である。まるで顔の影でもあるかのようにくつきりと浮き出た横顔を見せ、蔓のようにしなやかに足から上で体が左右に揺れている・・・」愚弟、家の馬鹿息子(サルトル)たるずんぐりした体形のギユスターヴと対照的な賢兄アシルの風貌だ。

『日記』には、「セーヌ河畔の丘のふもとに建っているルイ十六世風のファサードを持ったきれいな館」で、「彼の人そのものであるり、彼の趣味、彼の才能そのものである室内」が丹念に描写されている。「彼の真の情熱は、この種の猥雑な東方の情熱であり、彼の芸術家の本性のなかには蛮人的要素が含まれている」というのだ。「東方風に真つ赤な大輪の花模様の派手なインド更紗が窓や扉を飾っており」、東方の骨董があちこちに置かれている。緑青のついたエジプトの護符、矢、武器、楽器、アフリカの土民がその上で眠ったり、肉を切ったり、腰をおろしたりする木の台、銅皿、ガラス玉の首飾り、ミイラの足二本が「もろもろの本類の真ん中に、フィレンツェ産のブロンズ像さながらの色とその筋肉の凝結した生命を持ち込んでいる」というのである。これは十八世紀のロココ式

の美術品、日本の美術品で飾られた優雅なゴンクール兄弟のサロンとは際立った対照をなしているといわねばならない。もともと、彼の部屋を除けば、「家のなかはかなりきちんとしており、きわめてブルジョア的でいささか質素である」「ノルマンジー式の儉約が及んでいる」とある。

フロベールは書いたばかりのお伽噺『心の城』を読んできかせ、兄弟を辟易させる。「彼が書くなどとは考えられぬ、俗な物語」とふたりは評価する。

一緒に住んでいるフロベールの母親については、「一七九三年の生まれで（七十歳）当時の血の多い生命力を持続しておられ、ありし日の美人の威厳が保たれている」と記し、後にコマンビル夫人となってフロベールを困らせる姪はまだ可愛い女の子としてえがかれている。

乞われるままにフロベールは兄弟に中学時代の未発表の最初の小説などの原稿を、破れ鐘のような声で、「プールヴァール（大通り）演劇風の突然甲高くなる抑揚をつけて」朗読して聞かせた。晩飯前の休憩時間になると、旅行中に得た東方の衣装や仮装用具をあまり、「トルコ帽を威風堂々と頭にのせ、肉付きよい美丈夫らしく、血色よくつやつや、長い口髭を垂らし、威厳たっぷりのトルコ人の顔になってみせたり、むかしの長い旅行のときの古い革半ズボンを引っぱり出し、まるで、脱ぎ捨てた古い自分の皮を眺めている蛇よろしくしみじみと眺めるのだった」

フロベールは奇怪な文書の類いを探し出し、兄弟に読んできさせる。男色家で嫉妬のあまり自分の愛している男を殺し、ル・アールで断頭台にかけられた男の情熱の限りを綴った自筆の告白文とか、売春婦の手紙で、ありとあらゆる客あしらいの淫猥なサーヴィスの手練手管をしたためたものとか、三歳で胸部の前と後にせむしとなり、さらにひどい苔癬症にかかり、やぶ医者どもから硝酸やカントリスで生身を焼かれ、ついたびこのあげくいざりになった不幸な男の手記とかだ。そして次の日は、フロベールは旅行中のノートを読む。疲労困憊の強行軍、水なしの数日、虫にさんざん食われ、おまけにぞつとするような梅毒、治療の水銀薬のせいで起こったひどい下痢とかである。

これについて、ゴンクール兄弟は熟練した画家の毛筆のよい描写だと褒めている。淡彩画のおもむきあり、良心、勤勉、正確な描写への意欲があると。しかし、兄弟には留保があり、あのサワラを描いたフロマンタンにある「事物の根底の魂」がないなどと批判している。

『日記』にはフロベールは、二、三回パイプをふかしたほかは、終日それら原稿を読み上げ聞かせるので、ゴンクール兄弟は「彼の涉猟した国々、風景にすっかり疲労をおぼえた」という。時計が深夜十二時を打っても、まだギリシャからの帰国のくだりだったそうだ。フロベールは朝六時まで読んでもいいといったという。

その合間の文学論で、フロベールは永遠の芸術に専念すべきで、

特殊化するのを避けるべきだ、特殊なもの、地方色は純粹な美を生み出さないといったとあるのが興味ぶかい。兄弟がそれでは「君のいう美というものは何だ」と訊ねると、「このぼくがなんとなく興奮させられるものだ」といったという。兄弟はこれを真面目な意見とはみなしていない。しゃれのめした逆説だと思ったようだ。

フロベールは二十から二十四まで接吻したことがなく、それはそう決心したからだと言った。このことについて、ふたりは次のような印象を得た。「ここにこそ、この人の真相と秘密がある。

自分で自分に制限を課する人、それは本能的な人ではない、自然にしゃべり、自然に生き、自然に考える人ではない。ある種の虚栄心、ある種の内に潜む野心、ある種の秘密の論理、ある種の面子に従って自分を規定し、自己を形成する人である」

これは非難といったものではない。この驚くべき人物はそも何者ならんや、と文学者たる兄弟が分析し語り合つた末の結論だろう。

マニエールのフロベール

作家たちとて、集まれば終始高尚なる文学論を戦わしているわけではない。むしろ猥雑なる無駄話のほうが多いのだ。むしろ、品定めの際の話が主である。ある日、ゴーチエが、自分は性的でない女性、大いに若く、肉体を感じしめない女性に限るといった。ロリータがいいというのだ。

「するとその途端、フロベールが、顔を紅潮させて、どら声を張り上げ、例の大きな目玉をぎよろつかせながら、美は淫猥ならずといいだした。美女なるものは犯されるべくつくられたるにあらず、彫像にかたどらるるに適つた存在としてのみ有用である。情事なるものは所詮は昂奮のかもしれない出すかの何かしらわからぬものによつて為されるのであり、美からかもし出される何かによること極めて稀であるというわけだ。彼は己れの理想を述べたが、どうもそれが恥ずべき「トルコ人式」の理想であることが判明し、みんなにかかわれた。そこでフロベールは、自分がかつて本当に女性と交接したことはなく、いまだ童貞であり、これまで所有した女性はすべて自分の夢想するある別の女性のマッドレス代わりにすぎないのだといった」

フロベールは能弁で逆説をとばし、ゴーチエがインド人のいかさま師のように軽妙なのに、縁日の力自慢の軽業師ないしは激高した田舎の人よろしく、性交はからだの健康に不可欠ではなく、単に人間のつくりだす欲求にすぎないと断言したそうだ。必要なのは神経の発散であり、恋と感動と女の手をにぎるときのおののきである。これにはテーヌも反論し、ゴンクール兄弟はそんな仕合せを持つ男は当節稀ではないか、それぞれ、古くからの愛人、歴とした細君がいるのであって、そのかたわらでは感動もおののきもはやなくなつてしまつてゐる、だから人類の四分の三は神経的発散などおこなつておらんのだといひ、座は侃々諤々となつたそうだ。

フロベールは、蛮族は男色者、獣姦者であり、いっぽう文明人は自慰常習者、女性崇拜者だ、宗教的に女性をあがめるのだと断言したという。

また別のとき、フロベールは「ぼくはねえ、虚栄心が強いもので、まだ若いころ、友人たちと一緒に売春宿に行っても、一番みっともないのを選んで、みんなの前でその女とまじわり、しかも、葉巻を吸ったままおこなうなんてことをしたんだよ。ちつとも面白くもなんともないのさ。ただ、みせびらかすためだったのだから」といったそうだ。(一八六五年五月九日) 兄弟は、フロベールが根は率直な性質なのに、この癖があるので、いくら苦しむとか愛するとかいっても、決して完全な誠実さがなくなってしまうのだといっている。

ずっと後で、ツルゲネーフやドーデが女性に対する手柄話を開陳すると、フロベールは「ぼくだって豚だぜ」と思わず口走ったという。するとドーデは「冗談じゃありませんよ。あなたは男といるときにはシニカル(皮肉屋)で、女性といるときにはセンチメンタル(感傷家)です」と一蹴する。フロベールは悔しがって、上エジプトでかまどの中のように真っ暗ななか、体に黄金の鎖を七重八重に巻きつけた女が待っていて、「この女の尻は冷たく氷のごとじだが、その体はまるで炭火のように熱い。女は歓喜のさなかにもじつと動かない。この女によって、わかるかね、無限の悦びを味わうのさ、無限のな・・・」というのを、エドモンから、「おいおいよせ

よ、嘘もやすみやすみにしてもらいたいねえ」と揶揄されてしまう。

それで、ゴンクールの「豚の分類」

ツルゲネーフはセンチメンタル豚、ゾラは粗野豚、ドーデは病気豚。いずれ狂気が入り込む豚、エドモン自身は間歇豚つまり時々豚なのに対してフロベールは偽豚・自称豚だというのだ。大いに当たっている。(『日記』一八七六年五月五日、これはマニーの会ではなく、後の五人の会)

フロベールは『感情教育』執筆中、相変わらず、死んだ熊も同然の生活ぶり、兄弟は「地下の労役監獄に鎖に繋がれているがごとしだ」といっている。(『日記』一九六六年二月二十五日) だが、そういうフロベールがある日ゴンクール兄弟にいう。

「ぼくのなかにはふたりの男がいるのだよ。ひとりには、ご覧のように、やせた胸、重いけつして、机にかがみこむようにできている奴、もう一人は、陽気な小間物行商人、愛想よく、猛烈営業大得意の外交員だよ」

友達や女性にかこまれて陽気に呵々大笑する自分も好きだというのだ。そのいっぽうではクロワッセから「ふたりの坊や」に、長い手紙をくれというが、自分には何も起こらないから、困る、ペンとインクで暮らしているので、どちらにもうんざりで、書く元気もないとかなんとか書いている。

だが、この年、八月十三日、フロベールはシュヴァリエ・ド・

ラ・レジョン・ドヌール(五等)を叙勲した。後の『紋切型字典』では「つまらぬものといいつつ渴望するもの。もらえば、頼みもしないのによこしたというべし」とある勲章だ。恬淡を装っていてもフロベールはじつはこの勲章を望んでいた。『アンリエット・マレシャル』騒動の影響も心配していたのだ。フロベールはゴンクール兄弟に手紙で一緒に叙勲しなかったのは遺憾で、嬉しさも半減だと述べてはいる。エドモンもいづれ叙勲はするが、順序は明確だ。ナポレオン三世宮廷は折りにつけフロベールを招いたが、ついにゴンクール兄弟には機会を与えなかったのだ。

一八六七年、パリ万国博覧会が始まる。兄弟はフランスのアメリカ化だと書く。だが二月、兄弟はそれぞれ肝臓と胃を患って同時に寝こみ、ようやくにして再会したフロベールの元気を羨む。「野蛮なほどの血色、ここ六ヶ月の自ら追放の田舎暮らしのおかげで、活力横溢、いささかわれわれの神経にはこたえる。ともかく彼の才能のほうも、われわれの目からみると一段とスケールが大きくなったようだ」(一八六七年二月二十五日『日記』)

四月になり、ゴンクール兄弟は小説『ジェルヴェゼ夫人』の取材にローマに行く。フロベールは手紙で、パリに来たものの、「坊やたち」がいないのはとんでもないことで、ネジが抜けたようだ、マニー亭晚餐会に出たが二度と行きたくない、ばか話ではなく、喋っている奴がばかそのものだった、この二つは全然別のことだ、ともかくビスマルクとリュクサンブールのことだけなのだ、と書いてい

る。(フランスはプロシヤ軍駐留のリュクサンブール公国を併合しようとして交渉するが、けっきょく、ビスマルクが拒否する。戦争が取り沙汰されていった。五月にリュクサンブール公国の中立化が決まる。)

兄弟はローマからの返事に、「この情け容赦なき上天気の青く詩的な国では、過去と想い出に押し潰されております。われわれは病氣にとりつかれるのですよ。パリの冗談口調へのノスタルジーです。夕方、プッサン描く陽が沈む頃、コルソ(闘技場)を降りながら、グラッソ(喜劇俳優)の口調やラジエ(女優)の片言節句を思わず口に出したくなるものなのです。フェリーチェ水ばかり飲んだ後、ちよつとブルヴァール(大通)の流れでうがいをしたくなるという次第」などと書いている。

ゴンクール兄弟は七月ヴィーシーに滞在したが、パリの文壇がジャーナリズムに汚染されてしまった感を覚えていた。一種純文学の危機といった感じだった。「いまや、芸術のためだけに生きている者は稀になってしまった。われわれしかないのではないか、フロベールとわたしたちのトリオだけだ」(『日記』七月十二日)フロベールの方にしても、兄弟を文士の鑑と尊重する気持ちがあった。ただ、芸術家に特徴的なのは病弱だということで、健康はブルジョア的なむしろ恥ずべきものであるといわんばかりだ。フロベールはプランセスの手紙に書く。「兄弟はヴィーシーに行つてよかったです。エドモンはこのほか調子がわるそうです。でも、われわれ皆、調子はよくない。これこそわれわれのやっております職業のせ

いす」ゴンクール兄弟には二週間も下痢に悩んだと手紙に書いている。万博にはうんざりさせられた、でももうちょっと元気で筋力が残っていたら、中国帝国の娘をなんとかしただろう。医者がセックスを怠るな、というのでとかなんとか。

フロベールのゴンクールあての手紙は率直に自分の健康を語り、親友あつかいといってよい。いっぽう兄弟の方も、次第にジュールの健康が損なわれ、オートウイーユに新しく家を買ったにもかかわらず、隣家の厩で馬の踏みならすひずめの音に悩まされ、眠るために静かな場所を転々と求めて歩くことになってしまふことを書く。空虚感と身体的不調の焦燥感のうちに新年を迎えた兄弟はフロベールへの年賀の手紙にこういつている。

「今朝、御地よりの小箱（クレーム・ド・ソットヴィルなる菓子）有難く拝受しました。わが家唯一のお年賀品到来です。まことにうれしく感謝申し上げます。お蔭で二人だけで顔つき合わせる寂しい新年の食卓に貴兄が加わっていただいて三人になった感じがいたします。もうここ数年、元日はまるで二人だけの法事のようなものになっておるのです。それにとってもおいしく、目下たらふく食べさせていたただいたところですよ。

重ねて御礼申し上げます。あまり根をつめて無理なさらぬよう祈っております。

今年も大兄にとって素晴らしい年でありますよう。われら四本の手の握手送ります。

ジュール

ジュール・ド・ゴンクール

ジュールは調子がわるく、冷水のシャワーを浴びる水療法なるものも受け始める。この耐えがたい水責めを呪う。しかし兄弟は真摯な文士としての生活を保ち、小説『ジェルヴェゼ夫人』の仕上げに精を出していた。夕食は都心でとったりしている。

ラ・トゥルベ（フランス・ナポレオン等多くの愛人がおり、文芸サロンを開いていた。）が、いったんは兄弟に屋敷を売却する意向を示しながら手違いから別途に処分せねばならなくなった折、兄弟が極めて紳士的に振る舞ったことに感激し、フロベールに夕食会に誘って来てくれるように頼む。会食者には氣息奄々のジラルダンの「脳天に愛嬌毛よろしく巻き毛をのせた、死人じみた顔」もあった。胃にこたえるような粗末な食事だったと『日記』にあり、ラ・トゥルベはしゃれたことを言おうとつとめるが、たいがいは見当はずれだったともある。だが、彼女がマルトジュアスム(malthusisme)という語の定義を順番に訊ねると一同が切羽詰まって、てんでにばかげたるくでもないことをいったという。マルサス主義、人口を抑制するために産児制限せよという説のことだ。ジュールは夕食後、ゴーチエとフロベールのあいだで、品のよくない大論争があったと楽しそうに書いている。「前者ゴーチエはおぞましくもお下劣な鼻

持ちならぬ虚栄心を示し、女性たちをひっぱたいたことがあると
いったところ、後者フロベールは逆に女性たちに殴られてき
たが、でもその間、彼女たちを殺したいという大なる欲望は覚えて
いたと威張って言っていた」だから、「ルイーズ・コレのことでは
いつも重罪裁判所の法廷の椅子が自分の尻の下できしむ音がきこえ
ていた」とかなんとか。

ゴンクール兄弟の小説『ジェルヴェゼ夫人』は不評で、兄弟の失
望は大きかった。おまけに兄弟はプランセスの館に向かう辻馬車の
御者が酔っていて荷馬車に激突、兄弟は投げ出され、エドモンは目
の下をガラスで切る怪我をし、顔面血だらけになった、もう少し上
なら兄は失明したところだとジュールがフロベールへの手紙に書い
た。フロベールは小説を褒めてやっている。いっぽう、クロワツセ
の小説家は美術については兄弟に遠慮なく教えを乞い、例えば、子
供を描いた絵で何が良いか訊ねている。ジュールは「レーノー（イ
ギリスの画家）は子供のミルク色の肌を描くの長けていますし、
グルーズの子供の肖像は、その潤んだ眼差しがみごとです」と紹介
し、ヴァン・ダイクとヴェラスケス、ラッファエルとコッレジオ、
そしてルーベンスの「陽光に輝く子供」にも言及している。フロ
ベールは『感情教育』でこれを大いに参照し、ペルランがロザネッ
トに、その亡くなった子の肖像を描く支度をしながらいう説明のな
かに用い、特にレーノーの子供が「ミルク色の肌」だと、そのまま
の語を使っている。

七月、フロベールは兄弟を自宅に訪ね「かつてない程の旺盛なる
健康と力満々」の元氣印で兄弟を圧倒する。「ブイエが多血症肥満
者独特の不摂生のせいで致命的な病気になる」と語り、わたし
たちを慰め励まそうとまったく屈託ない開けっぴろげの快活さで、
却ってこちらを傷つけるのだ。出しなに、この肥満した男は叫ん
だ。《驚きなんだが、どうも、ぼくは病気の友人たちから精力をい
ただいている気分がするんだ》と

そして、ジュールは嘆く。「仕事こそわれわれの命であった。今
こうして肉体的にその仕事ができない感じにとらえられている。生
涯のあいだで自分の才能が最も花開いている年齢に達して、やりた
いことがどつさりあるのに、それが実行できない絶望があるのだ」
しかしそれでも、フロベールはジュールのために、「電気療法
士」(electiseur)として知られている医者クロワツセから紹介
したりしている。余計なことはいわず、ただフェイドーが治療して
もらいよかったらしいとのみしるしている。

そして、ゴンクール兄弟の書簡の執筆者がジュールからエドモン
に代わる。ジュールが書けなくなったのだ。その一八六九年十一月
二十四日の手紙で、エドモンはフロベールの出版されたばかりの『感
情教育』を読んだ感想を書いた。アルノー夫人は「心地よく勃起さ
せる」とフロベールの常用表現を用いて褒め、デローリエは「根が
嫉妬ぶかいので、邪悪と友情が間欠的に入れ替わり、代訴人独特の
性質まる出し、これぞ近ごろひろまっている真に汚い連中の完璧に

描写された人物像だ」、そしてフレデリック「君の恋の乾果実」は「君の意図通りに、情熱と才知とエネルギーの中庸にあるのを見事にとらえられている。この小説で、彼は才能がありながら、人生を失敗することになる欠陥を持つ主人公というわけだ。でも、この男は、覚悟したまえ、女性たちには不評だろうよ。彼女たちは、自分たちにすぐ手を出さぬ男として、気に入らぬだろうし、反動として、著者ギユスターヴは名誉ある、あるいは名誉なしの美形たちからすっかりそっぽを向かれるだろうよ」と評した。特に悪評をこうむったフロベールの情景描写を「君は事物を描くゴーフルの焼き型を持っている」と褒めている。

六月二十日、ジュールが死去する。その原因が脳梅毒であったことをエドモンは知らなかった。医者がいわなかったのだ。エドモンは知らせの長い手紙をフロベールに書く。クロワツセからは心のこもった慰めの手紙が「寡夫」となった兄エドモンに届く。エドモンはその後の手紙で、「ギユスターヴよ、会ってもらいたいと思う。一、二日君といっしょに居たい。君のなかで思い切り心をひらき、わが身を嘆きたいのだ」と書いている。ギユスターヴはすぐクロワツセに来るようにエドモンを誘った。『聖アントワーヌ』の取材旅行に出なければならぬので、すぐ来るようにと。エドモンは弱っていて、旅行の元気がなく、むしろフロベールが近くパリに来たとき寄ってもらいたいと返事した。その中で、オートウイーユの自宅をいったん売る決心をしたのだが、ジュールとの思い出のつまっ

たこの家を離れることなど不可能だと知り、死ぬまでいることにしたと書いている。だがそうするうちに、普仏戦争が始まってしまふ。フロベールは母親が倒れ、ルーアンから離れられなくなる。

戦後の再会

二人のあいだの書簡往復はいったんとだえるが、一八七一年六月十日、やっと再会することができた。「弟が亡くなつてから会っていなかったフロベールと、今晚、食事をともにした。『聖アントワーヌの誘惑』のために、調べることがありパリに出て来たのだ。フロベールは昔のまま、何よりも文学者だ。この度の動乱も、彼が平静に小説を書くことをいささかも妨げず、その頭上を通り過ぎて行ってしまった感がある」(『日記』)

そして、エドモンにしても、フロベールの家に傘を忘れたので、門番にとつておいてくれるように言っておいてくれ、目下、屋根屋、ガラス屋の仕事の騒音に悩まされているところだと、もっぱら日常生活のことばかりだ。

十一月十九日、パリに戻つて来たフロベールをエドモンが訪問、夕食を共にした後、フロベールが『聖アントワーヌの誘惑』を朗読して聞かせる。ゴンクールはまるで現代版『聖書』だ、独創性がみじんもないと『日記』にてきびしく書いている。それに「ベドウィン族とトルコの骨董で味つけた新機軸のキリスト教昔話だ……

古代に関する膨大なノートが幻想劇の阿呆らしい舞台仕掛に無理やり押し込まれた感じで、それと一緒に、「破裂して」もはや圧延機にかけるられるのもいさぎよしとしないほどの山なす参考史料も押し込まれている感じだ」と。

年が明けて、フロベールは亡くなったブイエの遺作を上演させようとし、ルーアン市議会にその銅像を建てるようながす書簡を書き、大奮闘だった。市議会のほうは拒否する。ゴンクールはフロベールが怒りっぽく、いらついで、かっかしており、これでは神経病に陥るのではないかと心配すると『日記』に書いた。

四月、フロベールの母親が死去する。悲嘆の暇もなく、大苦勞が始まることになる。

六月、フロベールはヴァンドーム市のロンサール像建立祝賀会に招かれ、「現代の下品無作法」と題する講演をするつもりだった。そのためパリに立ち寄り、ジョルジュ・サンド、フランセスを訪問、二十一日になって、エドモン・ド・ゴンクールと夕食を共にした。この暫く前、フロベールはフランセスに手紙で、「ド・ゴンクールがお好きだと仰いましたね。まったくごもつともです。これ以上の心こまやかな、申し分のない男はおりません。ほんものの貴族です。当節稀な存在です」と書いた。

いっぽう、エドモンはこの日のことを『日記』に書いている。フロベールの繊細で人嫌いな一面をよくえがいている。

「われわれは（カフェ・リーシュの）むろん、小部屋で夕食を

とった。フロベールは騒がしいのは嫌いで、側に人がいるのも好まず、食べるときには、服も靴も脱ぎたがるのだ。

ロンサールのことを話した。それから、政治のこと、文学のこと、生活上のばかげたことの話となり、彼は吠え、わたしは呻いた。

カフェを出たところで、偶然オーブリエ（新聞編集者）に会ったところ、サン・ヴィクトールも建立祝賀会に行くのだと教えてくれた。《それじゃあ、ヴァンドームなんぞへは行かないよ》とフロベールがいった。《ごめんだね、感情が高ぶって病的な状態になることがあるのだよ。そうなりかけているんだ。不愉快な御仁が汽車で目の前にいることになるなんて思っただけで我慢がならん、ぞつとするよ。むかしはどうでもよかったがね。《何とか別のコンパトメントに移ればいいんだ》などと思っただろう。それに万が一、その不愉快な御仁を避けることができなかつたとしたら、そいつを怒鳴りつければ気も休まっただろう。今じゃ、とてもだめですわ。事態を把握しただけで、もう胸がどきどきしてくる始末だね。うん、どこか、カフェに入ろう。家の者にあした帰ると手紙を出すから。》

それから、スワイエ（シャンペン入りシャーベット）のストローを前にして、フロベールはいった。《この年じゃもう嫌なことには辛抱できないわけだよ……ルーアンの公証人たちはほくのことを気違いを見る目付きなんだ。相続の問題でも、思ってもらいたいよ、

ほくとしては欲しいだけどうぞお取りくださいと言っているんだ。ところがほくに誰も何もいわんのだ。いらいらさせられるくらいなら盗まれるほうがましだよ。(亡くなった母親がクロワツセを、ギユスターヴは死ぬまで住むという条件でコマンヴィル夫人に相続させた。) 何もかもこんな具合だ。本屋もそうだし・・・今やっていることは、名もつけようもない一種の怠惰。それをやるしかないのだ。ほんとうにもう仕事以外やることはないよ」

手紙を書き終え、封をすると、《ばかをやりおえた男のように仕合わせな気分だよ。なぜか解るかい。なあ、解るだろうね?》と叫んだ。

それから、駅まで連れて行かれた。切符を買う行列に並ぶと横かまちに肘をつき、フロベールは深刻な倦怠だ、何もかもに勇氣粗相だと語り、死ぬことの願望を口にした。輪廻転生ぬきの死こそ望みだという。死後の生、復活、すべてまっぴらで、自分の自我を永久に脱ぎ去った死こそ来れと。

フロベールのいうことを聞いてみると、日ごろのわたし自身の思いを耳にしているような感じだった。何というみごとな生体破壊であろうか。最も力にあふれた者、最も頑健に生まれた者にして、頭脳をつかう生活がこれをもたらすのだ。明々白々だ。われわれは全員、半ば狂人であり、いずれ完全にそうなるべく運命づけられているのだ」

フロベールはクロワツセに戻ると『聖アントワヌの誘惑』を仕

上げ、はや『ブーヴァールとベキュシエ』を考え始める。まず医学の分野にねらいをつけて、資料を読む作業に入った。現代の腐敗と自らいうものにいらだつ気分で、孤独に徹していた。しかし、暮れにはパリに戻り、エドモンに落ち込んだ気分を知らせている。ジョルジュ・サンドにはパリを歩きまわるのでよく眠れると書いている。一八七三年一月五日の『日記』に、フロベールが「調子よくない」と愚痴つてよこしたとある。「まったくそうだ。この才能ある男は、ドローズ(風俗作家)やプロ(同)風情が金銭的に成功するのに憤慨し、その莫大な収入、かかる低俗文学で有名になることを卑しげに渴望するその風潮に憤激して死ぬのだ」

当時ツルゲーネフがパリに滞在しており、その巨軀とスラヴ訛りのフランス語、女性を語る会話の楽しさでマニー亭の会食者はじめ多くの文壇人を魅了していた。ジョルジュ・サンドはフロベールと一緒にノアンに招いている。そのサンドがパリに出てきたので、ツルゲーネフの希望もあり、フロベールがレストランのヴェフルで夕食会を催し、これにゴンクールも招いた。このときの模様は、エドモンが『日記』に詳しく書いている。「年齢が進むにつれて、フロベールはますます田舎者じみてくる。それに、本当をいえば、わが友人から例の牛の要素、勤勉で嫌なことでもやりとげる家畜のさが、一時間に一語の割合いの小説書きの部分差し引いてしまえば、目の前にいるのは、まこと「人並みの」才能の、独創性のきわめてとばしい人物である。何もここで、思想とか着想の独創性のこ

とだけをいつているのではなく、行動とか生活の趣味の獨創性のことをいうのだ。秀れた人物の常に保持する刻印であるはずのあの特有の獨創性のことなのだ。ああ神のみぞ知る。彼の頭脳とその他大ぜいの脳とのあのブルジョアの類似はどうだろう——このことがフロベールの、実は、しゃくの種だとわたしは確信する——この類似を隠すために、どぎつい逆説を使ったり、辛辣な警句、革命家はだしのわめき声、既に認められている思想、紋切り型に対する乱暴で、育ちのよくないとすらいえる反対の言辞を弄することになる。それが、時にはうまく行くこともある。しかし、誰に對してであるか。誇張の激しさは、明敏な觀察者のそばではすぐさま言葉だけの冗談でしかないことがおのずと明らかになるのだ。

一言にしていえば、フロベールは自分がはなはだしい情熱家であると自称している。ところが実際は女性が彼の人生では比較的二義的役割しか果たしていないことは友人がみなこれまでも知っていたし、今も知っていることだ。金錢についても、フロベールは自分は使いが誰よりも気違いじみている男などと自称しているが、さて、フロベールは何の趣味もなく、どんなものも買わず、何か突飛なものも一度でも彼の財布に穴をあけたためしがない。フロベールは自分が、家のなかの居心地よさと上品さをつくり出すことにかけては稀に見る空想家だと自負しているが、さて、フロベールがこれまでで発明したものといえば、しょうがのジャムの壘をいくつか花瓶にしただけなのだ。もっともこの発明は、彼が相当に御自慢では

あった。そして一事が万事なのだ……『ボヴァリー夫人』の著者の思想、趣味、習慣、偏見、能力、悪徳、ことごとくこれ一般大衆と同類なものだ」

辛辣であるが、よく書けている。ジャポニスムになぞ何の興味もないフロベールだし、いずれドーデ夫人をも辟易させることになる、あえてする野人ぶりにせよ、この通りなのだ。サンドもこの日の夜モーリス（息子）への手紙で、フロベールは気まぐれで騒々しい、それに座の主役を独占したがると非難がましく書いている。でも、エドモンはそういうギュスターヴを愛しておるのであり、その手紙を読むかぎり、だいに思っていることは間違いないことだ。

フロベール自身、むろん自覚はあつたらう。ゴンクール兄弟著『ギヤヴァルニ』に對する礼状の批評で、画家の仮装舞踏会のデッサンを紹介するゴンクールの文について「だが、また何という面白そうな生活だろう。踊っている連中はまだ若いのだろうね。何とみごとに楽しんでいることか。われらの世代はまったくもって《快樂》を知らないでいるのだなあ。われわれはお行儀良くしつけられており、陰気くさくって死人じみている」

フロベールはヴォードヴィル座の支配人から芝居を書く依頼を受け、この年、『候補者』なる脚本を仕上げた。その上演準備に立ち合うためパリに出て来て、プランセスの館を含めてゴンクールと何度か食事を共にした。フロベールは意気軒高で、威勢よくしゃべ

り、相変わらずゴンクールを閉口させた。

「彼はうまそうに食っていた。ヴォードヴィル座の本読みにすっかり子供じみた張切り方なのだ。もう大へんな満足である。ほとんどわたしの上に倒れこみ、わたしの胸を指先で打つものだから、まるでフェンシングの剣先のたんぼで突かれているかのような感じがした。何をいうかといえば、かつての自分ほど恋におぼれた者はこの世にいないだろうというのだ。もう既に一度聞いたことのある話をまたわたしに語る絶好の機会なのだ。ノルマンジーの断崖絶壁で危うく一命を落とすところだったというので、それはタドルという名前のニューファンドランド犬を抱こうとしたためであり、その場所こそは彼の愛人がいつも接吻してくれたのだという話である。彼をとらえた四番目の恋の情熱であり、売春宿とかその他のいくつかのごくあたりまえの恋愛とは違って、彼が心の奥ふかく、三十二年もの長きにわたって秘めてきているものだそう。恋の情熱は彼の人生では、悲喜劇的場面で結末となることが多い。ある日、それほど長くあこがれてきた彼女が優しくなり、なびいてくれそうな感じがしたその時、彼のほうはにわかにも便所に行きたくなったというのだ」

フロベールは神経が興奮して嵐のようになり、プランセス・マチルドが「あなた方、みんな、まるで子供ね、もう氣違いよ、フチュ・コシヨン（お下劣豚）だわ」ともらしているのをエドモンは聞いたそう。だ。「あなた方」と複数にしているが、フロベール一人の責任

であることはいうまでもない。

『候補者』はみごとに失敗だった。四日間打ち切られてしまふ。「とつくに人気のなくなった舞台にフロベールは二、三人のままでイポリットの護衛兵のように茫然とした故郷ノルマンディーの人たちにかこまれていた。（ラシーヌ作『フェードル』で最終幕、イポリットが殺されたあと立ちつくす護衛兵）もう男優も女優も一人もいなかった。作者を置き去りにして皆逃亡したのだ」（『日記』一八七四年三月十二日）「もちなおすよ」エドモンは慰めるがいかなともなしがたい。四日目、空いばりしていたフロベールも終に「エドモン、何もいうことないよ、こりゃ惨敗もいいとこだ」といったという。

それでも、フロベールはゴンクール、ツルゲーネフ、ゾラ、ドードと夕食会を再開した。これが「五人の会」となる。「野次られ作家の会」などと自称した。ドードがみごとに文で紹介しているが、楽しい会で、料理もフロベールにはノルマンディー産バターとルーアン鴨の蒸し焼きが不可欠、洗練され、異国情緒好みのゴンクールはしょうがジャム、ゾラはウニと貝が好物で、ツルゲーネフはかならずキャビアを食ったという。幹事役はいつもフロベールだった。

そして夏、フロベールはスイスの山に文字通り神経の保養に出掛けた。今や『ブーヴァールとペキュシエ』に打ち込まねばならない。ゴンクールの方も盛んに旅行した。ドイツ南のコンスタンス湖からフロベールに手紙を出したらしい。それに対するクロワツセか

らの返事。

「お手紙によれば、落ち込んでいるようだね。こっちまで、こたえるよ。あまり物事を深刻に見ぬことだよ。あまり真面目に考えると転んでしまうようなことになる。だから要はからだを動かすことだ。読んでもらう本をいくら面白くしても無駄だ、さっさとやめるほうがいい。計画する本がばかげたものであるかもしれない。かまうものか。書こうではないか。『カンデイド』の終わりの「自分の畑を耕そう」が最もまっとうな教えだよ。釣りや狩りで時間を過ごしておられるのかどうか知らないが、(エドモンはやまやうずらを撃ち、ざりがにを釣っていた。)かえって害のある暇つぶしだよ。気晴らしでは気が晴れぬものだ。興奮剤が興奮させぬのと同じことさ。ぼくはいくら神経症だといわれても、実際はおとなしいもんだ。で、大兄にお願いするが、勇気を持って、仕事に復帰されますように。後ろを振り返ることなどやめて・・・」

フロベールはここで、医者のおすすめでスイスに行つて元気を回復したこと、若者のように階段を上るし、小説(『ブーヴァールとペキュシエ』)を再開したこと、それは三、四年かかること、はじめは一行も書けなかつたが、目下好調だと記している。ナダールの店にも行つて見よとも書いている。アレキサンドル・デュマの肖像写真があるなどと。

年が明けて、一八七五年正月、ゴンクールは肺炎で臥せていたが、これは回復する。だが、例の「五人の会」の一月二十五日の第

二回目は、肝心のフロベールが病気で欠席した。

春、フロベールの家を訪問して出て来たところで、ゴンクールとゾラは二人の友人が元気がないので、変だという話になった。(『日記』四月十八日)「われらのこの著名なる男の周りに輝きがない」ということになったというのだ。エドモンは文学の精進のせいだと思ふが、やがてフロベールから、姪のコマンヴィル夫人の夫の破産に伴う財政事情によるものと判明する。いっぽう、エドモンは日本美術に耽溺し、楽しくしていた。買い込んで大いに悩んだりしている。というのはある鞆革職人に第一抵当で貸した金(八万フラン＝約二二〇万円)が、破産で、焦げ付いてしまった悔やみがあつたからだ。

大晦日の日、フロベールはゴンクールに長い手紙を出した。エドモンが『売春婦エリザ』を書き終えたのを知っているので、良い正月を迎えられることでしょうと祝い、「幸運の女神のひも」になれますようにと書く。

だが、ツルゲーネフが雇い人に金を盗まれ(十五万フラン＝約四千五十万円)たことに触れ、「われらは運命的にこういう風に打撃を受けることになっておるのか」とも書く。「オートウイーユの家を手放すとかいう話もあつたそうだが、聞いただけで戦慄した」こんな年になると慣れ親しんだ家を出るなんて死んだも同然だ、「君もおれも甲輩性がないが、これもまあ、貴族の性質の証明みたいなものだ、でもそれではともかく楽しくないな」などと嘆いた。

フロベールは自分の方のうつとおしい問題は解決していないこと、四年間は義理の甥が金を得ることがない限り、困難は続くこと、しかし、何が起ころうとますます気に入っているクロワツセは離れないこと、むしろパリの住居を売りたいこと、でもまだそういう事態にまでは至っていないことなどを知らせた。「もつとも、一年前から、将来のことは気にしない習慣を身につけました。(それなりに努力したのです。)どうともなれ!です。一日一日で仕事には十分です。

過剰なほど仕事をやっております。原稿は遅々としておりますが。『エロディアス』はちょうど半分です。目下の努力は『サランボー』に似ないようにすることです。どうなりますか、分かりません。・・・櫛の木のように元気です。昨日は三時間、森を散歩しました。(昼間しか外の空気を吸いに出ません。なにしろ息がつかまる気がしてくるのです。)そして、夕方、月がきれいだったので、うちの庭を散歩しました。「夜の天体の詩的な光」に照らされてです。

今年九月の下旬、貴君と同じように、何度か神経的なめまいがしました。大いに不安になりました。でも、大丈夫、何でもありませんでした。どうか安心して下さい。これは、思うに、(パリに滞在中)《若ぶり》したせいでしょうかね。——でも、うまくやったとは思うのですがね」

フロベール、この時、五十五歳である。

フロベールは八月末パリに来て、サンシグラシアン(マチルドの

館)に滞在したが、行動不審だった。それをエドモンに釈明して「ムッシュューは剣の錆び落としのために、自らのドルシネア姫訪問中でありました。(プランセスの館での玉突きとか空気不足とかその他もろもろを御免こうむりたいと考えてのことです。)」と手紙に書いている。それからノルマンデーの取材旅行をしてクロワツセに戻ったところだと。

フロベールは政治の痴呆化に憤慨している。

「この分野のことではどうでもいいという思いがありますが、少しひどすぎると思うのです。《道徳の秩序》なるもの(少なくとも地方では)奇想天外な愚劣の域に達しています。わが知事はラブレーと地質学の講演会を禁止しました。理由は?《わが住民は》(「ルーアン新聞」の言い方)密かにいらだっている。だが、最もみごとだったのは、(学院の)ボードリー神父(サンスクリット学者、哲学者、フロベールの友人)です。反フリー・メイソンの激高状態のところを見ました。穏健な人々をこのように扱っておるのです。

この人間のあさましい愚行で、目下押し潰されている感じがします。ヒマラヤ山を背負った蠅の気分です。仕方ない。自分の本の中にこの毒を吐き出すしかありません。この希望でやっとなんとするのです」(《道徳の秩序》はマクマオン大統領と議会の対立のなか、議会の共和主義者野党を抑圧する目的で大統領から持ち出されたもの。)

フロベールの座談

作家なるもの座談で人を魅了しないような人は稀である。ユゴー、デュマ、ゴーチエ、ドーデ、ツルゲーネフ、いずれも名手といつてよかつた。フロベールも例外ではない。ゴンクール兄弟はいかなる場合も常に聞き役だった。エドモンが書きのこしている。

「フロベールは、主役をいつも彼に委せ、彼がしょっちゅう窓をあけるために風邪をひかされても気にしないという条件さえ認めれば、きわめて気持ちのよい仲間である。彼には上機嫌なにぎやかさと、誰にでも感染する子供のような笑いがあるし、それに、常日頃の付き合ひにおいて、彼のなかに大きく深い情愛が、ますます広がってゆくのがわかり、それが魅力なしとしないのだ」

〔日記〕一八七八年九月二十一日

実は、フロベールはこの二日前、プランセスの館で、大いに座をわかせたのだ。

「今晚、足とか鼻、口の匂いが時にすさまじいことがある話となり、フロベールが興にのり、大いに弁じた。

臭鼻症患者なるものの例をフロベールは先ず語った。それがいつも鼻から膿を垂らしていたそうだが、セピア色をなしており、トルソー博士（有名な医者）は診療室を逃げ出さねばならなかつた。翌日にならないと戻れなかつたというのだ。しめくくりの大花火として、フロベールはペッサリーの話をした。彼の父親がある魚屋のお

かみさんの腹から引っぱり出したもので、十七年も忘れられていたものだったそうだ。その猛烈な悪臭に、ルーアン病院のインターン三人が気絶して尻もちをついたそうだ。

これらの話にプランセスは大喜びで、下品なうんこの話をしてもらつた子供のように浮かれ、笑いを吹き出しながら長椅子にひっつきかえつてしまった。彼女によれば、悪臭でも嫌いでないものもあるという。むしろ心地いいそうだ。例えば、イタリアの神父さんたちの匂いなどそうだが、痩せたお方に限る由で、太った人はまっぴらだという。

変ではないのか、かかる会話の趣味は。それにプランセスときたら、高尚ならざる、上品ならざるものの文学には鳥肌現象が起こると仰有る。そしてパッチューリ（防虫剤）もヴェルヴェーヌ（薬用茶）の匂いもわからぬそうだ」〔日記〕一八七八年九月十九日

フロベールの面目躍如だ。

いっぽう、作家自身の環境は改善どころか、悪化の一途をたどつていた。コマンヴィルの製材所は完全に倒産した。その上、出版社シャルパンティエはお年玉用として『聖ジュリアン伝』の豪華本を出すことを断つてくるし、ドロスは『心の城』を出したがらない。

「フロベールは可哀想に胸の痛む状態だ。彼は今や丸裸らしい。そして愛情の面でも破産となつており、周囲の者は彼が葉巻を吸うのすら非難する始末だそうだ。彼の姪は《伯父様つて変な人ね、逆境に耐えられないのね》などといったらしい」とエドモンは嘆いてい

る。(『日記』一八七九年十二月十日)

だが、シャルパンティエ夫人は自宅の晩餐会にガンベッタを迎えた折、フロベールの苦境を知らせ、何か公職の適当なポストをさがしてやってくれと頼む。そのことをエドモンはプランセスに手紙でくわしく語っている。マザリーヌ図書館というのがあり、一八四三年にマザラン枢機卿が自分の図書室を公開して以来というからフランス最古である。この館長ポストにフロベールを就けようというのだ。エドモンのフロベール宛ての手紙によれば、庭のある住居付きで、閲覧者はいないというから、閑職でもってこいだ。ところが下院議長たるガンベッタは自分独自の候補を持っており、確言はしなかった。だが、約束してくれたとゴンクールとシャルパンティエ夫妻は思いこんだのだった。

ガンベッタへの工作が失敗した後、モーパッサンが尽力し、フロベールはマザリーヌ図書館の副館長のポストに就くことになる。家つきではないが、義務はなく、年俸三千フランというのだ。現在の邦貨で百万フランに満たないが、ないよりはましだ。

『ブーヴァールとペキュシエ』そして浮世絵版画貼

フロベールは彼の最後の小説になってしまふ二人の愛すべきブルジョアの物語に熱中していた。ゴンクールへの手紙でも、「目下、形而上学に没頭しております。これを明確なもの、生きたものにする

るのは容易ではありません。お察しの通りです」と書いている。(一八七九年七月十日) アダム夫人がその雑誌「ヌーヴェル・ルヴュ」に『ブーヴァールとペキュシエ』を発表すると言い出すと、「わがお人好ふたりの物語はまだ全然終る段階ではありません」と、懸命に断った。いかにだいじにしていたかが分かる。ちなみに、このマダム、折しもスペイン南西部ムルシアで起った大洪水で数百人の死者が出たので、その見舞いとして企画されたチャリティーにギユスターヴも貢献するように頼みにきた。フロベールはエドモンへの手紙に、「いったい、このわたしに何ができるのですか?と訊いたんだ。返事なしだ。で、夢みる次第だよ、ボレロを踊れというのか、ギターを弾けとかいうのか。それとも領主さんの仮装で騎馬行列に出ればいいのか」と書いている。作家はこれは何とか断った。ところが、十二月二十日の「ヴォルテール」に《エコ・ド・パリ(パリ・ゴシップ)》と称して、匿名記者の記事が出た。いわく、

「間もなく『ボヴァリー夫人』の新作小説『ブ*とペ*』が出るが、題名のそれ以上ははばかる次第……ギユスターヴ・フロベールについてはルーアンではつとに次のような逸話が話題になる。

ある日の夕方、『エルナニ』が上演され、フロベール家全員が棧敷に陣取った。中学を出たばかりのギユスターヴは独りだけ平土間の席だった。反対派が一隊を組織し、第一幕から猛烈に野次った。幕が降り、騒ぎがおさまると、棧敷から、フロベール博士が、息子

はユゴー崇拜者だと知っていたので、「《どうだったかね?》という合図をした。青年は、冷静を保つことはなはだうとく、立ち上がる。目下自分がどこにいるのかも弁えず、大音声で呼ばわった。今でも同氏は同じ声だ。《野次った奴はばかもんだあ》かかる率直さこそ、依然としてフロベールが保持しておられるところである。コンピエーニュの両陛下御前で、熱意をこめてロシユフォールを称え、その言を保証して見せるために懐から「ラ・ランテルヌ(灯火)」をひっぱり出したものだ」

これも、「家の馬鹿息子」を証明するための証言のひとつみたいなものであるが、わがフロベールは「三日間もむしゃくしゃした」とゴンクールへの手紙で書いている。犯人は「まさかシャルパンティエ自身ではあるまいな」ともある。何よりもわが「お人好ふたり」のイニシャルを公表したのは怪しからんともいう。「まるでロシユフォールを皇帝の前で絶賛したことを二人が保証しているかのようではないか。やっつけていけば、大手柄だったところだ。ルポルターージュが聞いてあきれる」

ちなみに、ここに出て来るロシユフォールは伯爵だが、筋金入りの反体制で、モルニー公爵がほとほと手を焼いた相手だ。(芸大音楽学部紀要一九九五年「退廃せるパリの脳髓・モルニー公爵」参照)

ゴンクールはフロベールを慰め、「ヴォルテール」に載った『ある芸術家の家』の日本版画集の講釈部分を送った。それに対する返事。

「《朋友フロベール》は、本日午後、大兄の『日本版画集』にて目の保養致し候。然れども、我かかる色彩の饗宴に屢々耽溺するは望まず。さらば、しかる後、わが《哲学的なる》小説に戻るべくんば、多大なる呻き声発せざるをえざるべし。何とて運命の女神、我をして常に嫌悪すべき《主題》をば選ばせしむるか・・・

大兄の日本画集につき述べられること甘美にして有益なり。格闘士(相撲取り)、女の着物、水に愛着するかの人々の楽しみ、エトセトラ。然り、わが友よ、世辞抜きにて、これなるは見事なる書き様。このままに一本に仕上げ候あれば、絶妙なる書たらん。敬具」

『書簡』編集者デュフィエ氏は『ある芸術家の家』に「水こそはこの国の情熱である」とのエドモンの説明があることを指摘しておられる。

フロベールが最晩年に、ともかくも、日本の浮世絵の美をゴンクールに教えられたことがこの手紙でわかる。実物はエドモンが示したことがあるのだろうか。

最後のクロワツセ

一八八〇年三月二十八日、復活祭の日曜日、ドーデ、ゾラ、シャルパンティエ、ゴンクールの四人はフロベールに招かれて、クロワツセに出かけた。「ゾラはこれから目録をつくりに行く競売鑑定業者の手代のように上機嫌で、ドーデは細君から解放されてこれか

ら淫売屋に駆け出そうとしている男のようであり、シャルパンティエは勝手に飲めるビールがずらりと並んでいるのを見つけた学生のようであった。わたしはといえば、フロベールを抱擁できるのを喜んでいた」

途中、汽車の窓からゾラのメダンの新居がキャベツ畑の真ん中に建っているのが望見された。

「モーパッサンが馬車でルーアンまで出迎えに来てくれており、やっとフロベールの家に着くと、彼はカラブリア（イタリア南端の州）風の帽子にずんぐりとしたジャケット、ひだのついたズボンに大きな尻を入れ、愛情にあふれた顔で迎えてくれた」

「あの大きなセーヌ河の上を、船の姿は見えぬがそのマストだけが、芝居の背景のように通りすぎる。海の風に苦しめられて、身をよじらせる巨木たち、果樹牆のある庭園、陽のいっばいにあたる長い散歩用テラス、アリストテレスの逍遙学派風の散歩道が、この真の文人の住まいをなしている。——これぞフロベールの家——一八世紀に、ベネディクト派の修道院だったものだ」

「夕食は素敵であった。クリーム・ソースをかけた鰯であったが、絶妙だった。あらゆる種類の酒をたっぷり飲んだ。一晩中あけすけな話はずみ、フロベールは子どももの笑い声のような大声で笑った。彼は自作の小説の一節を読むのを断った。もうそんな気力はない、《へとへとだ》といった。それから皆で寝に行ったが、寝室はそれぞれかなり寒く、家族の胸像が飾られていた。

翌日遅く起き、家の中にこもっておしゃべりをした。フロベールが散歩なんか無駄な骨折だと主張したからだ。昼食をとって出かける」

ルーアンで、用ありげに先に帰ったドーデを除いて、残りはルーアン市内を散歩した。エドモンは骨董屋で一对の三千フランもする薪掛を買ってしまった。散歩は疲れるのでやめ、カフェで玉突きをし、うまい夕食をと願ったが、魚にありつけず、エドモンはロス・ト・チキンのまじい食事をとった。汽車は混んで二時間遅れだった。「おお、田舎よ、もう二度と田舎で骨董品など探さないぞわたしは誓った」とある。だが、これがエドモン・ド・ゴンクールがフロベールに会った最後の日になったのだ。

「五月八日土曜日、《明日の日曜日はフロベール先生のお宅へおいでになりますか》と女中のペラジューがちょうどいったところへ、彼女の娘が電報を一通持って来てテーブルの上に置いた。《フロベール、シス》とあった。

ああ、しばらくのあいだ、体が震え、心が乱れて、自分が何をやっているのかわからず、どの町を自分が馬車で走っているのかわからなかった。時にはゆるみもしたが、けっしてほどけることのない絆でフロベールとわたしは互いに秘かに結びついていたのだとわたしは感じた。そして今日、六週間前、彼の家のしきいのところで、別れを告げながら、フロベールがわたしに接吻したとき、彼のまつげの先に涙が震えていたのを思い出して、深い感動をおぼえる

のだ。

実際、わたしたちふたりは新しい流派の老いたるチャンピオンであった。そして今わたし一人が生き残った」

この言葉はいうまでもないが、エドモン・ド・ゴンクールの掛け値なしの真摯な思いである。言葉というものはいいものだ。

おわりに

葬儀に赴いたエドモン・ド・ゴンクールにコマンヴィル夫人はフ

ロベールが最近セーヌ河向この女ともだちを訪問したといった。

「その人は、その日、生まれたての赤ん坊をばら色のゆりかごに入れて、テーブルの上ののせていた。この訪問から帰る途中ずっと、フロベールは《あんな可愛い子が家にいるなんて、この世にこれ以上のものはないよ》としきりに繰り返していたそうだ」

〔日記〕一八八〇年五月十一日

そしてフロベールの葬儀の模様。新聞記者やビュルティールはじめ一般参列者の心ない振舞い、偉大な作家の姪なる人のはしたない言動、その夫なる人物のやくざそこのけの悪党ぶりが『日記』に記されている。そんななかで、

「ドーデがしてくれた話。今朝汽車に乗るか座らないうちに、(ジヨゼ＝マリア・ド・)エレディアが、ドーデがきちんと黒手袋をしているのを目ざとく見つけた。見られたとわかると、ドーデは

笑ってこういったそうだ。

《もうこうやっているので驚きましたか。え？でもね、ぼくにとっては汽車ってやつは物見遊山で、休暇の楽しみになっちゃうものですから・・・それでこの黒手袋はぼくがどこに行くのか自分に思い出させるためなんですよ》

ドーデが本物の作家であることを、したたかに思わせる話だが、いい話であることには間違いない。エドモン・ド・ゴンクールもそう思ったのである。

(おわり)